
牙狼<GARO>～MAGICA SENKI～

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牙狼〈GARO〉～MAGICA SENKI～

【Zコード】

Z4896Z

【作者名】

ゼロデイアス

【あらすじ】

黄金騎士・牙狼である「冴島鋼牙」はホラーを倒した直後、そのホラーの能力が倒された瞬間に丁度発動してしまい、鋼牙は光に包まれ、その世界から消え去つた。

そして鋼牙が行きついた場所……そこは「魔女」を狩る者、「魔法少女」がいる世界だった。

『序章』

「陰牙」と呼ばれるゲートを通り、人を食す魔獸「ホラー」。

ホラーを狩り、人を守りし者「魔戒騎士」、その中でも名が高く、いまや最強の魔戒騎士とまで謠われ始めた「黄金騎士・牙狼」の称号を持つ男、「冴島鋼牙」、彼は胸に「破滅の刻印」と呼ばれる呪いをかけられ、徐々にその命が尽きて行く。

それでも鋼牙は魔戒騎士の使命を真っ当し、ホラーを狩り続ける。

そして今も、身体中に時計が張り付いている黒い魔獸、「ホラー・スリム」と暗い森の中で戦っている最中だった。

ロングコートを羽織り、1つの刀を握り締めてスリムへと斬りかかる男性は「冴島鋼牙」である。

『こいつはスリム、深夜0時になると毎回時代を超えるっていう厄介なホラーだ』

そう説明して来るのは彼の左手の中指にある骸骨を思わせる形をした指輪、「魔導輪ザルバ」である。

「ならば0時になる前を片をつけねばいい……」

刀、「魔戒剣」を握りしめてスリムへと斬りかかる鋼牙だが、スリムは飛行して一瞬で鋼牙の背後に回り込み、身体中から時計を鋼牙へと放つ。

「ハツ！！」

だが、それに動じずすぐに鋼牙はスリムの方へと振り返り、魔戒剣で時計の全てを弾き、破裂く。

大きく、高く飛び上がつて魔戒剣をスリムへと振りかざすがスリムは片腕で受け止める。

【ギシャアアアア！…！】

咆哮をあげるスリム、鋼牙はスリムの腹部に強烈な蹴りを入れた後、2回ほど魔戒剣で斬りつける。

【ウウウ！？ シャアアアア！…！】

スリムは鋼牙へと突進してくるが、鋼牙は魔戒剣を掲げ、円を描くと鋼牙は狼の黄金の鎧を身に纏いし姿……「魔戒騎士・牙狼」へと変わる。

魔戒剣はその際「牙狼剣」に変化し、殴りかかつたスリムの拳を左手で受け止め、右拳でスリムを殴り飛ばす。

「フッ！！」

【ウシャアア！…？】

牙狼剣を鞘から引き抜いてスリムに接近し、牙狼剣を振るうがスリムは素早い動きで避けて牙狼に掴みかかるが、掴みかかる前に牙狼に顔面を殴られる。

「ハツ！！」

【シャアアアア！？】

再び牙狼と向き合つた時には……牙狼剣で真つ二つに切裂かれていた。

【ウアアアアア！？】

だが、その時丁度深夜の〇時が来ており、まだ完全に消滅していかつたスリムの身体の時計の針が回りだしたのだ。

『鋼牙！… 今すぐそいつから離れる！…』

「なに……？」

すると突然眩い光が放たれ、鎧を解除した鋼牙を飲み込んだ。

「なんだ、これは！？ ぐわああああ！？」

そして沢島鋼牙はこの世界から消えた……。

『序章』（後書き）

ザルバ

『なんか、作者の書く牙狼の作品はどれも続かなかつたが今回は大丈夫だろ、多分。まあそれはさておき、鋼牙が目を覚ますとなんと何故か鋼牙は教師になつっていた。次回『異界』。本来出会わなかつた者達が会う!』

『異界』（前書き）

マリちゃん出番〇一
でもエタまどみみたいにならないから大丈夫！

『異界』

「う……ん？」

鋼牙が目を覚ますとそこは職員室のよつな場所……というより実際職員室なのだが、なぜか鋼牙何時もと違い、教師らしい服装を着ており、なぜ自分がこんな場所にいるのか困惑していた。

左手を見るとそこには自分の相棒、ザルバがあるのに一安心し、ザルバに心で会話する「念話」を使ってザルバと話し合ひ。

『ザルバ、ここはどこだ？』

『さあな、ただ一つ言えることは、あのホラー倒される瞬間に能力が強制発動しちまつて暴走、周りに时空の歪みを『えたんだろ？』

『つまり……？』

鋼牙の質問にザルバはこう答える。

『时空を超えるってのは世界を渡ることもできる。要するにここは異世界のようだ』

『異世界……元に帰る方法は……、今の所分からぬいか』

そこに、メガネをかけた1人の女性教師と思われる女性が鋼牙に話しかけてきた。

「あの、すいません。今日新しく副担任になつた渕島さんですよね？」

「副担任？」

鋼牙は理解した、この世界では自分に役目が与えられている、それがこの女性が担任をしているクラスの副担任なのだと、鋼牙は理解したのだ。

(しかし、なぜ副担任なんだ?)

そんな疑問は兎も角、この女性「早乙女和子」について行き、教室へと案内されて向かう。

だがその途中、和子は足を止めて鋼牙に振り返る。

「どうした? 授業に遅れるぞ?」

(相変わらず普段は無表情だな)

ザルバがそんなことを考えているが、和子はあることを鋼牙に聞きたした。

「あなた、卵の焼き加減について……どう思いますか?」

鋼牙は「はつ?」という表情をしている。

「答えてください!! 卵の焼き加減にあなたはイチイチ、ケチつける人ですか!!?」

鋼牙に詰め寄る和子、鋼牙は和子から離れ、間をとる。

「別に不味く無く、味が悪く無ければ食えればなんだって構わん」

和子はその返答に「えつ?」と驚いた表情をしており、鋼牙は教室の場所を和子に尋ねる。

「（まあ、ゴンザの料理が1番だが）それで、どこの教室だ？ 早くしないと遅れるぞ」

「あっ、は、はい……／＼」

なぜか顔を和子は赤らめており、鋼牙と共に教室に向かった。

その後、なにやら転校生もいるらしいので行く途中、ある場所で待つて貰っていた黒く長い髪の少女「暁美あけみほむら」を迎えに行つた後、教室に向かい到着。

教室には和子が先に入り、呼び出しがあるまで廊下でいることになつた鋼牙とほむら。

「「……」

廊下で2人は黙つたままだつた。

鋼牙は大してなにも考えていない、対してほむらは……。

（こんな男の人、今までいなかつたのに……。まあ、ただの教師ならなんの問題も無いわね。キュウべえは男は魔法少女なんかにはれないと言つていたからきっと何の問題も無いわね。今までと変わらず、まどかを……）

心の中で今、ほむら教室の中にいる桃色の髪をした少女「鹿田かなめまどか」のことを思いながら、教室の様子を伺つている。

和子は教卓を両手で叩き……。

「皆さん、今日は先生から大事なお話があります……。いいですか女子の皆さん!! 卵の焼き加減にケチをつけるような男とは交際しないように…。そして男子は『上手ければなんだって構わん』と言える男になるように…。」
(それは、俺のことか……?)

と思いつながら教室の様子を見ていた鋼牙とほむる。

(「Jの讓ちゃん、なんか鋼牙と雰囲気似てんなあ」)

ザルバがそんな事を思つており、教室では先程のまどかが男勝りで青い髪をした少女「美樹さやか」^{みき}と話していた。

「あつちやー、今回もダメだつたか」「でも、なんだか先生の台詞から見るともう新しい人見つけた感じだよ?」

苦笑いしながらせつ話しあひすやかとまどか。

「あー、あと転校生と新しい副担任の先生を紹介します」

ケロッと態度を変えて笑顔で鋼牙とほむらが入つてくるように言ひ出す和子。

「いやいや、そつちが先でしょー?」

さやかのツツミには気付かず、まどかはさやかに転校生が入つてくるか、さやかと一緒に予想して見る。

「もしかしてリーゼント頭で学ラン着て『Jの学校の生徒全員と友

達になるー』とか言う人が入ってくるのかな?『

「有り得るかも、そんで『宇宙キタ——————』 タイマンはらして貰うぜーー』とかいう感じの人とか?』

それは無い。

まどかとさやかが笑いながらそんな会話をしており、鋼牙とほむらが教室に入つてくる。

(普通俺達が先じゃないか?)

黒板にチョークで名前を書く鋼牙とほむら。

「暁美ほむらです。よろしくお願ひします」

(予想してたのと全く正反対そつなのキタ——————)

自己紹介を終えるほむらと、予想していた人物と正反対のほむらでそんなことを思ひさやかだった。

まどかはほむらの姿を見て夢の中で会つたよつた気がしていた。

(あの人……夢の中で)

「それにしてもすっげー美人だし、副担任とかすっげーイケメン

だがどちらも無愛想な顔をしている。

「冴島鋼牙だ」

(えつ?あの先生はそれだけ?)

*

その日の放課後、鋼牙は元の世界に戻る為になんらかの方法を街に出かけて探っていた。

因みに、魔戒剣が見当たらないと思えば自分の意思で出したり消せたり出来るようになつており、今は何時ものロングコートの服装である。

さらに、仮面の男に刻まれた呪いの証、何故か「破滅の刻印」が消えていた。

『こんなウロチョロしてるだけでなにか手がかりが掴めるのか?』
「他に方法は無いだろ?、じつとしているよりカマシだ」

しかし、あちらこちらに行つても全く何の情報も無い。

『所でよ、鋼牙。ずっと気になつてたんだが
「なんだザルバ?」
『鋼牙の住む場所……どこだ?
「……」

ザルバの言葉に、黙りこむ鋼牙。

「野宿か」

『マジかよ……』

その時、丁度鋼牙は「シ○ヤ」の近くでおつ、そこからまどかが飛び出してきて何処かに走って行く。

「んっ？ あいつは確か……クラスにいた」

鋼牙は制服を着ている為もあり、まどかの顔を覚えていた。

それに続き、さやかも飛び出してまどかを追いかける。

『なんか、嫌な予感がするぜ』

『ああ、追つぞ』

鋼牙もさやかとまどかの後を追いかける。

*

薄暗い場所、そこで傷付いた兎と猫を合わせた不思議な生物があり、うめき声をあげている。

「へ……へへ……」

丁度そこにまどかが着て生物を抱える。

(あれ? この子……)

この生物もほむり動搖夢の中で出合っていた。

「凄い畜我してる。どうしたの！？」

まどかが心配そうに生物を見る。

「そいつから離れて！！」

そこに黒い衣装を着たほむらが現れた。

卷之三

卷之三

「相変わらず汚い真似するのね」

その言葉は生物に対する言葉だらう。

「ほむりけせんがやつたの!? ダメだよ、『いんな』」と…」

その時、消火器をさやかがほむらに目眩しの為に使用し、さやかはまどかの手を掴んで共に逃げだす。

「逃げるよまどか！！」

「 もやかひやん…」

まむりから逃げていったやかとまどかは……。
「 なんだよあいつ！？ ハスブレ通り魔！？ ていうがまどかそれなに！？ ぬいぐるみとかじや、無いよね？」

「 うん。 でも凄い怪我して……」

*

その時、まどかとさやかのいた空間が「歪み」だした。

周りはあるで落書きをしているかのようであり、また彼女達の前に先程と同じ姿をした小型の魔女の使い魔が現れ、まどかとさやかを囲む。

「 ひっ、なにこれ…？ 」
「 へへへんな…！」

使い魔がまどかとさやかに襲い掛かった時。

突然飛んできた魔戒剣により、使い魔は弾かれるかのように吹き飛ぶ。

【キシャアア！？】

空中で回転する魔戒剣を鋼牙が見事にキヤツチし、魔戒剣を構える。

「ザルバ、なんだこいつ等は？」

『さあな、たたホラーじゃないって』こと、
つて所だな。唯一分かつてるのがな』

【ギシャアアアアアアアアアアアアアア】

使い魔達が物凄いスピードで鋼牙へと襲い掛かるが、鋼牙はジャンプして使い魔1体を踏み台に、一瞬で周りにいる使い魔達を魔戒剣で切裂き、今踏み台にしている使い魔も地面へ降りる際に一刀両断。

【シャアアアア！-！-！？】

ハアア！！

背後に気配を感じ、廻し蹴りを繰り出すと蹴りが使い魔2体にヒットし、さらに襲い掛かってくる使い魔も次々魔戒剣で切裂き、倒して行く。

鋼牙が少し目を話した隙に別の使い魔が2人を襲おうとしており、
鋼牙急いで行こうとし、ジャンプして一気に2人の元まで行き、2
人を襲おうとした使い魔の内の殆どの使い魔を魔戒剣を素早く振る
つて1体を残し全滅させ、その残った使い魔を鷲掴みにした鋼牙は

別の方向にいる使い魔の1体に激突させ、その激突した使い魔が吹き飛びまた別の使い魔に激突、よつて使い達はなにやら喧嘩を始め出す。

「す、すじつ」

「フツ、これで隙だらけだ」

使い魔達に走つて行き、隙の出来た使い魔達を次々破裂き、全ての使い魔が全滅した。

だが、今度は人間大の使い魔が現れたのだ。

『どうやらまだいたようだなあ。 しかも今までの奴より強いんじやねえか?』

「だつたらこいつちも本気になるまでだ」

鋼牙は魔戒剣を掲げて円を描き、振り下ろすと光に包まれ、黄金の狼の鎧を身に纏いし魔戒騎士、「黄金騎士・牙狼」となり、背後に見た事も無い文字が浮かび上がった円が現れ、それが爆発し、牙狼のバックに炎が燃え盛る。

「な、なんだよアレ……？」

「でも、どこか安心できるような」

さやかとまどかは牙狼に驚きを隠せなかつた。

その炎はすぐに消え、人間大の使い魔達は大量のハサミを出してゆつくり牙狼に近づく。

だが牙狼は逆に素早く動き、ハサミを牙狼剣でいとも簡単に破壊す

る」ことが出来、一気に本体の身体を破裂を使い魔を倒す。

だが残りの使い魔達が一斉に牙狼に斬りかかったが……。

『ジユウ～』 という音を立ててハサミが溶けていたのだ。

牙狼が纏っている鎧は「ソウルメタル」と呼ばれるもので出来ている、この牙狼の鎧をなんの修行もせずにただの一般人などが触れれば、その皮膚を簡単に溶かしてしまえばほどのもの。

どうやら使い魔のハサミなども溶かしてしまうようだ。

【シャアアアア！？】

牙狼は牙狼剣で使い魔達を叩き潰して行き、使い魔達と距離をとつて間を開けるとライターのようなものを取りだし、緑の炎「魔導火」を牙狼剣に灯す。

「ハアアアアア！？」

牙狼は牙狼剣で×と剣を振るい、×字の縁の炎の斬撃が使い魔達を切裂き、高く飛び上がりその炎を牙狼が纏うことで成り立つ姿「烈火炎装」状態になり、降り立つと下から縦では無く、右から左といふように牙狼剣を振るい、そこから縁の炎の斬撃が放たれ、横に次々切裂かれて行く使い魔、使い魔達は次々爆発していく、今の一撃で使い魔達は全滅した。

鋼牙は制限時間が限界な為、鎧を解除。

「す、スゲー」

「う、うん

まどかとヒサヤカが感心しておつ、空間が元の空間へと戻る。

「あ、あの、先生つて一体……？」

まどかが声をかけよつとした時、金髪でカールの髪の少女「田中マリ」^{たなかマリ}が駆けつける。

「あら？ 魔女の気配がしたのに……つてキュウベテーーー？」

マリがまどかの抱えている生物に駆け寄り、心配やつに声をかける。

「えつ？」

『鋼牙、まずはこいつ等と話をした方が良さそうだぜ。』

「ああ、帰る方法も分かるかもしないからな」

鋼牙はまどか達の元へと歩いて行く……。

*

次回予告。

ザルバ

『 よう、お前等もしもなんでも願いが1つ叶つてしまつとか言つ奴が
来たらどうする？ もしも信じるなら氣をつけた方がいいぜ。何
故なら……。 次回『契約』。 良過ぎる話には裏がある』

『異界』（後書き）

因みになぜ鋼牙が教師の役割かと言つと、ほむらの力が関係している。たゞ。

『契約』（前書き）

ちょっとグダグダな感じに……。
何気に嘘突きますキュウべえ。

『契約』

あれからマリは変わった服装の衣装になり、「魔法」と呼ばれる力で白い生物「キュウベえ」の傷を治した。

「それにして、一体こいつなんだ？」

鋼牙がキュウベえを不思議そつて見ており、「マリはやのことだらけで驚いている様子。

「あなた、キュウベえが見えるの？」

「ああ、そうだが……こいつは普通の人間には見えないのか？」

鋼牙の疑問にキュウベえが「普通はね」と答える。

「それにしても、私の友達を助けてくれて有難う

「なんで名前知りてんのー？」
「それでね、君達にお願いがあるんだ」
「お願い？」

首を傾げるまどかとさやか。

「あのね、僕と契約して……魔法少女で、なつてよー」

その様子を影から見ましめに睨んでくる玲。

「……誰だ？ セレニティのせ分かつてこる」

鋼牙はほむらに背中を向けてこる状態で、ほむらがこるに気付いており、少しほむらが田を見開き姿を現す。

「転校生……！」

「ほむらちやん……」

「魔女はもう逃げたわよ。」

マリの「魔女」とこいつ喧嘩に反応する鋼牙。

(魔女……？)

「私が用があるのは……」

「飲み込みが悪いわね、見逃しておがるつて言つてるの」

少し怒りが籠つた口調で喋るマリ。

「お互い、トラブルは起したく無いでしょ？。」

ほむらは黙つたまま、その場から姿を消した。

「取り合えず、話は私の家でしょ？。セレニティのあなたにも聞きたいことがある」

「断る理由は無いな。俺もお前達について聞きたいことが山ほどある」

*

一同はマリの住んでるマンションへと向かい、セレディナツヘツと話し合ひをすること。

「私、一人暮らしだから遠慮しないで。口クにおもてなしの準備も無いんだけどね」

紅茶を入れてテーブルに人数分出すマリ。

紅茶を鋼牙が飲むと……。

(これはゴンザ並に美味しいかもしれない……)

「ゴンザとは鋼牙が住んでいる屋敷の執事であり、鋼牙は彼の作る料理が一番好きなのである。

「つまつー」

「さやかちゃん……」

さやかにも好評であった。

「キュウべえに選ばれた以上、他人事とは言えないものね。魔法少女のこと、説明しておくれ」

とまず最初にマリは宝石のようなものを取り出す。

これは「ソウルジム」と呼ばれるものであり、魔法少女の魔力の

源である。

キュウベえとの契約により生み出されたる宝石。

「契約とはなんだ？」

鋼牙の質問に、キュウベえが答える。

「そう、僕との契約によってソウルジエムを手にした者は『魔女』と戦う使命を課せられるんだ」

でもその代わりになんでも願いを一つ叶えてくれるそうだ。

「じゃあ願いを100件とか」

「それは無理」

等とちやかとキュウベえがやっていたが、話は進む。

次に魔女だ。

魔法少女が希望を振りまく存在なら魔女は絶望を振りまくる存在、世間でよくある理由のはつきりしない自殺や殺人事件は大体が魔女の仕業なのである。

魔女は常に結界の中に身を隠している。

「鋼牙さんが助けに来なかつたらきっとあの場所から帰れなかつたかもしれないわ」

マリのその言葉に背筋が凍るまじかとさやか。

「あの、あの時は本当に有難うござります。先生」

「ホントに助かった！ 有難うね、先生！」

「別に構わん」

他にも魔法少女がいるのか聞いてみると、沢山いるらしくほむらもその1人。

「でもさ、魔法少女って魔女を倒す正義の味方なんでしょう？ なんでまどかを襲った訳？」

正確にはキュウベえを狙っていたらしく、他の魔法少女が誕生するのを阻止したかったのだろう。

「魔法少女は必ずしも味方同士って訳じゃないの。魔女を倒すとそれなりの見返りがあつてね、手柄の取り合いで衝突することが多いの」

鋼牙はそれを聞いて自分にもそんなことがあつたなと思い始める。

「銀牙騎士・絶狼」の鎧を纏いし者、「涼邑零」、彼とは当初は衝突することが多く、何度も争つたことがあると。

だが今では和解し、彼も鋼牙の仲間である。

「それで、あなたのことなんだけど……」

「そうだよ！ 先生何者！？」

鋼牙は全て話すべきかどうか悩んでいるとザルバが鋼牙に話しかける。

『鋼牙、ここは俺達の世界じゃないからな。だから捷とか気にせず話していいんじゃないか?』

「えつ? 指輪が喋った! ?」

「どうこうと! ?」

『やれやれ、騒がしいお譲さん達だな』

そして鋼牙も話し始める。

自分は「魔戒騎士」と呼ばれる人を食すホラーを狩る者であること、別の世界から来たこと、ザルバは意思を持つ魔戒騎士をサポートする役割を持つ「魔導輪」であることなど……。

「信じがたい話だけど、キュウベえから聞いた話だと信じるしかないわね……」

「魔法少女とは別の力ですからね」

上からマリマリとまどかが喋り、話を魔法少女の話題に戻す。

まどかとさやかは魔法少女になるべきかならないべきか悩む。

「じゃあ明日、どういうものか知りたいなら私の魔女退治に付き合つてみない? 魔法少女がどんなものか、自分自身の目で確かめてみればいいと思うの! 」

*

その後、家へと帰つたまどかことやか。

鋼牙に至つては「いか野宿出来る場所を探す。

『鋼牙、お前はどう思つ? 契約つづーのは?』

「あ、魔女なんて俺が知らない未知な力だ。ただ……本当に願いを叶える代わりに魔女と戦うだけなのか……?」

鋼牙は「契約」になにか引っ搔かており、しかしそれが何なのか分からぬ。

『まつ、明日お前も誘われてんだから一緒に行つた時に聞けばいいじゃねえか』

「ああ」

*

その翌日、放課後マ○ドでまどか、さやか、マリ、鋼牙が集まつており、「魔法少女体験ツアー」を開始した。

「さつき体育館から押借りしてきた! これでまどかを手つりあげる!

!..!

「あ、あはは……有難う、さやかちゅん

「うん、まあ、意氣込みはいいわね」

まどかは何か持つてきただのかと聞くと……。

「えっと、取り合えず衣装だけは考えてきたー。」

と魔法少女になつた時の衣装をノートに書いて持つてきまどか。

「プツ……」

それに笑いだすセセカヒマリ。

「な、なんで笑うんですか！？ マリさんまでー。」

『いやあ、俺は別にいいと思ひば？』

ザルバの言葉を聞き、まどかは「ホント！？」と笑う。

そして店を出てソウルジムを見せるマリ。

「ここは昨日魔女が出現した場所である。

「光ってるのが分かる？ 昨日、ここにいた魔女の気配に反応してるので」

基本はこの反応を頼りに魔女を追いかける。

魔女が起こす事件は障害事件や交通事故、そういうた場所を探らないとダメだそうだ。

それと弱つた人の多い病院に魔女が取り憑くと生命エネルギーを吸

い取られてかなりマズイことになるひじい。

「病院……」

キュウベえはまどかに抱えられており、鋼牙はキュウベえに昨日の疑問について尋ねて見る。

「契約した魔法少女は本当に魔女と戦うだけか？」

その質問に、無表情だがどこか驚いたような雰囲気を漂わせるキュウベえは……。

「ああ、そうだよ」と答えたのだ。

「……」

だが鋼牙はまるで信じていないかのようにキュウベえを一瞬睨みつける。

（なんで先生はそんな怒ってるんだろう？）

その時、ソウルジエムが強く光り、魔女が近くにいることを示していた。

「うわーー！」

魔女が反応があった場所は古い廃ビルであり、屋上から女性一人が飛び降りた。

「ツーーー！」

「危ない！！」

しかし、マミが魔法少女になつて魔法で女性を助け出し、ゆっくりと地上に寝かす。

「大丈夫よ、気を失つてるだけ。魔女の口付け、やつぱりね」

「なんだそれは？」

「話は後です、魔女はビルの中！ 追い詰めないと！」

マミは魔法でさやかの持つているバットを強化し、一回はビルの中に突入した。

ビルの中には人間大の髭の使い魔達があり、鋼牙は魔戒剣、マミは長銃で使い魔達を倒して行きながら進み、さやかはバットでまどかとキュウベえを守りながら使い魔を叩きつぶす。

「あつ、先生危ない！！」

鋼牙の背後に大量の使い魔がいたが、鋼牙は魔戒剣で一瞬で背後にいた使い魔達を切裂き倒していく。

「や、やつぱり凄いな先生
「行くぞ、この奥がマミ？」「
「え、ええ」

マミは鋼牙の強さがここまで行くとは思つておらず、呆気にとらわれていたが遂には魔女のいる場所に辿り着いた。

その姿はグロテスクな姿をしている魔女「ゲルトルート」の場所に辿りついた鋼牙達。

「あれが魔女よ」

「以前は姿を現さなかつたな」

さやかとまどかはゲルトルートのグロい姿に退いていたが鋼牙にまどかとさやかを任せてマミはジャンプして銃でゲルトルートを撃つがゲルトルートは素早く避ける。

だがその戦いは、鋼牙とザルバから見てみればまるでまどかとさやかに自分の力ツコイイ所だけを見せようと戦っているようだつた。

マミの足元に蝶らしきものが纏わりつき、それが触手となつてマミの身体を縛り壁に叩きつける。

「うひー！？」

「マミー！」

マミは2人に笑みを見せて「大丈夫」と答えるが、鋼牙が飛び出し、マミを縛っていた触手を魔戒剣で切裂く。

「えつ？」

「お前はなにもするな。あの時外した弾は奴を拘束する為のものだろ？ だが……、お前はもつ戦うな」

魔戒剣をゲルトルートに向ける鋼牙。

「なつ、ビ、どうしてですか！？」

「1日お前の様子を見ていたが、お前は本当の戦いといつものを見つけていない」

鋼牙は魔戒剣を握りしめ、高く飛び上がってゲルトルートの背中に乗り魔戒剣を突き刺す。

「ハアアアー！」

【シャアアアー！？】

(どうして……?)

ゲルトルートは暴れて鋼牙を振り落とすが鋼牙は普通に着地し、ゲルトルートと向き合つ。

その時鋼牙は気付く、自分の足元に蝶らしきものが纏わり、マミと同じく拘束しようとしているのに。

鋼牙はすぐに蝶を振り払い、接近して来るゲルトルートの攻撃をジヤンプしてかわし、急降下しながらゲルトルートの顔を斬りつける。

「やあああー！」

【シャアアアー！？】

ゲルトルートの元に人間大の使い魔達が現れ、鋼牙は魔戒剣を掲げて円を描き振り下ろす。

黄金の鎧を身に纏いし「おうごんきし黄金騎士・牙狼がろう」となつた鋼牙は牙狼剣を構え、ゲルトルート一直線に走つて行く。

その際、ゲルトルートを守るとする使い魔達を牙狼剣で切裂き倒しながら進み、頭から突撃してきたゲルトルートを牙狼剣で防ぐ。

「ぬううー？」

そのまま牙狼はゲルトルートに押されて行くが……。

「ノーリー、ノーリー、ノーリー……」

両手に力を込め、牙狼剣を縦に振るうとゲルトルートの頭は真つ二つに割れ、血らしきものを頭から噴射しながら消滅していく。

歪んでいた空間、魔女の結界も消滅し、牙狼は鎧を解除。

魔女がいた場所には黒い球体が落ちていた。

「なんで先生マリさんのお魔したんだよ!?」

さやかが鋼矛に文句を言つてくるか……。

「戦いは遊びじゃ無い。見せびらかすかのような戦いをしていたら何時か死ぬぞ」

鋼牙はどこか怒ったような表情をしながら「帰る」とだけ言い残し、その場から去つて行つた。

『契約』（後書き）

感想などお願いします。

予告は思いつかないので……。

『覺悟』(前書き)

O P · 挿入歌「牙狼」SAV1OR
IN THE DARK

『覚悟』

ある夜の公園で使い魔が結界を張つており、マミが使い魔と戦つており、さやかとまどかがついて来ていた。

「ティロ・フィナーレ……」

巨大なマスケット銃を取りだして大技を使い魔達に放ち、使い魔達を全滅させたマミ。

使い魔達が張つていた結界なので使い魔達がいなくなれば消滅する。

「やつぱつマミさんカツコイイー……！」

「もう、見せ物じゃないのよ」

上からさやかとマミが喋り、そこで突然鋼牙が現れた。

「「先生……」」

さやかとまどかが声をあげ、鋼牙はマミに近寄る。

「やはりな、お前は今の戦い方を変える必要がある

どつやら鋼牙はあの結界の中にいたらしく、先程の戦いの様子を見ていたのだ。

「どうこいつですか？ 鋼牙先生？」

少し鋼牙を睨みつけながらもマミは鋼牙に尋ね、鋼牙は答える。

「なら教えてやる。 小物の使い魔如きに大技を使う必要があるのか？」

確かに使い魔達は特撮などで出でてくる戦闘員並に弱い。

そんな弱い相手にマミの最大の技であるティロ・フィナーレを使つ必要がどこにあるのだろう？

先程マミが戦つていた使い魔も数は少ない方だった。

「相手が多すぎるなら確かにあそこで最大技は使うべきだろ。だが少數の相手にワザワザ大技を使う必要は無い。ハッキリ言わせて貰う、お前は浮かれている」

鋼牙の言葉に、さやかが怒るがマミが止める。

「確かに……そ、なかもしれません……。 後輩が出来るかもつて思つとい嬉しくて……」

その後、教師の務めか、まどか、さやか、マミを家まで送り届けることにする。

「そう言えば、グリーフシードを落としませんでしたよね？」

グリーフシードは魔法を使って消費した魔力を再び注入する為に必要なものであり、時々魔女が持つてていることがあるのだ。

尚、濁り切るとマミ曰く「魔法が使えないらしい」。

そしてまだかの質問にはキュウベえが答える。

「今のは魔女から分裂した使い魔だからグリーフシードは持つてないんだ」

「つて、リリとハズレばっかじゃない?」

少し愚痴るややか。

「使い魔だって成長すれば魔女になるのよ、放つておけないわ」

マリはまだかとせやかに願い」とが決まったか尋ねると2人ともまだ決まって無いやうだ。

マリはまだかがマリはまだかな願いをしたのか尋ねて見る。

その時、マリは暗い表情を見せる。

「私は……」

「あつ、別に言いたくないなら言わなくていいんですけどー。」

しかしマリは首を横に振る。

数年前、家族でドライブに行つた時、交通事故に巻き込まれ、死にかけていた所をキコウベえが現れてマリに願いを聞いた。

そしてマリは「助けて」と願い、マリは魔法少女となつた。

「考える余裕さえ無かつた……つてだけ。だからね、選択の余地があるあなた達にはきちんと考えて決めてほしーの。私に出来なかつたことだからこそね」

「マリサちゃん、ほんとうに微笑む。

「あ、あのマリサ……」

「さやかがマリサ」「願い事は自分以外の願いでもいいのか」と尋ねる。

「例えばの話なんだけどさ、あたしよりもずっと困ってる人がいて
その人の為に願い事するのって出来るかなって……」

「さやかちゃん、それって上條くんのこと?」

「た、例え話だつてまどか!?!」

キュウベえは可能だと言つが、マリサは「感心出来ない」と言つ。

「ああ、確かにそうかもな」

マリサは鋼牙も賛同する。

「さやか、お前自身の願いはなんだ?」

「えつ?」

突然の鋼牙の質問に戸惑つてしまひさやか。

「美樹さん、あなたはその人の夢を叶えたいの? それとも夢を叶えた恩人になりたいの? 他人の願いを叶えるならなおのこと自分の願いをハッキリさせておくべきだわ」

「あつ……」

だからあの時鋼牙はあんな質問をさやかにしたのだ。

「同じようなことでも、全然違うわよ。キツイ言ひ方で『ごめんね、
それを履き違えたまま進んだらきっとあなた後悔すると思つから
』

さやかは頷く。

「私の考えが甘かった、『ごめん』

その言葉にまどかとマリが咲ひと笑みを溢す。

鋼牙に至っては相変わらずだが。

まどかと咲ひを送り届けた後、鋼牙はマリと話しかかる。

「お前、親がないと困ったな

「はい」

「俺にも親がない、両親とも俺が幼いころ死んだ」

その言葉にマリは「えつ？」となる。

「だからこそ、お前は今の戦い方を変えなければならぬ。
だ両親の分まで、生きる為に

両親の分まで生きるなら戦わない方がいいだろう、しかし、それでは意味が無いのだ。

「この間はすまなかつたな

真面目な表情で喋る鋼牙に、マリは困惑つつも、「有難いじゃ一
ます」と頭を下げた。

その後、鋼牙とマリは別れて別々に帰った。

*

翌日、さやかは幼馴染である「上条恭介」のお見舞いに病院へ来ていた、彼は事故で左手が使えなくなつており、バイオリストであるのでよくさやかが音楽のCDを持つて行き、喜ぶと黙つて恭介に持つて來ていたのだ。

それにはまどかとキュウベえも付き合つていたが、どうやら恭介は今日は都合が合わないらしく、仕方なく帰ることになった。

だが、病院の近くで孵化しかかつてるグリーフシードがあった。

これが孵化すれば魔女が生まれ、大変なることになる。

そこでさやかは自分がグリーフシードを見張ると宣言出し、それにキュウベえも残るの言い、その隙にさやかはまどかにマリと鋼牙の所まで行つて来て欲しいと頼む。

「マリとまどかはレパシーで会話できるし、こどもなつたまどかを魔法少女にする事もできる」

「分かった、それじゃ私はマリさんと鋼牙さんを呼んでくる……！」

まどかが急いで走りだし、マリと鋼牙を呼びに行く。

だが、まどかは途中で重大なことに気が付いた。

(鋼牙さんの家って、どこにあるんだろう…。)

鋼牙が住んでいる場所が分からぬ為取り合えずマリだけを呼ぶことに

*

数分後、マリを連れてまどかが戻ってきた。

「キュウベえ、状況は!？」

結界内に入り、マリがキュウベえとテレパシーを使い会話をす。

『大丈夫、まだ孵化するには時間がかかる。 急がなくていいからなるべく静かにきてくれるかい?』

迂闊に卵を刺激する方が危ない、だからキュウベえがそう言ったのだ。

因みに結界の中はお菓子なのが沢山ある結界だつた。

結界の外ではザルバが魔女の気配を感じ取り、鋼牙もこの場所に来ていた。

『しかし、まさかホラーだけじゃなく魔女の気配まで分かるとは俺自身驚いたぜ』

「なんでもいい、行くぞ」

鋼牙も結界の中に突入し、先へ進む。

そしてまどかとマミが途中、さやか達の元まで歩いている時、ほむらが目の前に現れた。

「またあなたね、暁美ほむら」

「今日の獲物は私が狩る。もちろん結界内の2人の安全は保障するわ（幸い、キュウベえは見殺しにしても問題ないしね）」

だがマミはほむらの言ひ事を聞かなかつた。

「だから手を退けつて言うの？ 信用すると想つて？」

マミが地面上に手を置くとコボンらしきものが地面から現れてほむらを拘束する。

「なつ！？ こんな」としてゐる場合じや………

「怪我させるつもりはないけどあんまり暴れたら保障しかねないわ。行きまじょ、鹿田さん」

まどかはほむらに申し訳無をそつた表情をしながらもマミと一緒に

「は、はい」と答えて2人は奥に進む。

(へつー田マリが死んだらまどか達にも大きな影響を悪い意味で
与えてしまつ……。なんとかしないと! 今度の魔女は何時もと
違つて……)

まどかとマリが歩いてる途中、まどかがマリに呼びかける。

「なに?」

まどかは自分なりに色々考えて見たとマリに伝える。

まどかは自分がなにも出来ず過ごして行く自分がずっと嫌だった、
だが誰かを助ける為に戦つてるマリを見てそれと同じことが出来る
かもしれないと知った時、なによりもそのことが嬉しかった。

「だから私、魔法少女になつたらそれが叶うんです。こんな自分
でも、誰かの役に立てるんだよって、胸を張つて生きていくこと
が夢だから」

「私、憧れるほどのものじやないわよ?」

マリは本当は戦つのが怖かった、まどか達の前では無理やりカッコ
つけてるだけだとマリは言つた。

「鋼牙さんの言つ通り、ただ自分をカッコよく見せようとんな戦
い方してただけ、先輩ぶつてるだけ、独りになれば何時も泣いてば
っかりだし

まどかに背を向ける状態だが、マリが悲しそうな表情をしている
のはまどかにも分かった。

「今は独りか？」

「えつ？」

「今は独りかが声がした方に振り返ると鋼牙がいた。

「えつやまどかがマリと別ルートで来た為にまむりと接触しなかつたよしだ。

「今、お前は独りか？ 違つだろ、まどかやさやかもいるー。お前はもう独りじゃない

「やつですー！ もう独りじやなこですよ」

上から鋼牙とまどかが喋る。

「私なんかじゃ頼りないかもしないんですけど、でも……マリさん傍にいることなら出来ます。一緒に戦って、いいですか？」

まどかの涙を流すマリ。

「あ、あはは…………せひダメだなあ、私は先輩らしくしてなきゃいけないのに。でも有難う、もしかんだわ」

マリはまどかと握手する。

「魔法少女コンビ、結成だねー！」

「だったらもうコンコンする必要はないわねー！」

その時、キュウベえが念話で魔女の孵化が始まった知らせを聞く。

魔法少女に変身するマリ。

「 もう、なにも怖くない！」

「 いや、その姫さまが戻れるなー。」

「 えつ？」

突然の鋼牙の忠告。

「 戦いへの恐れを忘れるな。 それは戦いにとって必要なものだ」

「 はい！」

マリは力強く頷き、マリは長銃、鋼牙は魔戒剣で使い魔達を蹴散らしながら進んで行く。

そしてさやかとキュウベえの元に辿り着いた時、既にファンタジックな魔女が椅子に座っていた。

『 おいで、隨分可愛らしい魔女だな』

「 ……こやつ」

鋼牙だけはなにか嫌な予感を感じていた。

「 お出まじの所悪いけど、一気に片付けてやるわーー！」

マリの銃での連続攻撃を喰らひ魔女「シャルロッテ」、そしてマリがリボンで拘束し、ティロ・フィナーレを撃つ体制に入ったが……。

「 ナニを離れる、マリ……。」

「 えつ？」

鋼牙が突然叫び、するとシャルロッテの口から芋虫のようなシャルロッテの本体が現れた。

シャルロッテは巨大な身体を持っており、口を大きく開けてマミー一直線に向かってくる。

死を覚悟するマミーだが……。

『ガキン！』

シャルロッテは鋼牙の投げた「魔戒剣」で弾かれるように起動を変え、空中で回転する魔戒剣を鋼牙はキャッチ。

「大丈夫か？」マミー。

「あつ……はい……」

膝を突き、呆然とするマミー。

あの時、鋼牙が助けなければ……。

マミーはやつと思うと首筋が凍る。

「まだやれるか？」

「あつ、は、はい！」

「だったら一緒に奴を倒すぞ！」

魔戒剣をシャルロッテに差す鋼牙。

鋼牙は頭上に魔戒剣で円を描き、振り下ろすと光に包まれ「黄金騎

士・牙狼」の鎧を纏う。

「はあああーーー！」

牙狼剣を構えてシャルロッテに突き進む牙狼。

シャルロッテは一直線に牙狼に向かつて「行くが、顔面にマミの放つた銃での銃弾が直撃し、軌道を反らす。

その隙に牙狼が高く飛び上がって牙狼剣をシャルロッテに振り下ろす。

だが、シャルロッテは牙狼に切裂かれる瞬間口からシャルロッテが脱皮して回避。

「なに！？」

よつて牙狼は抜け柄となつたシャルロッテを切裂いた。

瞬間、シャルロッテは牙狼に向かい大きく口を開き、牙狼に噛みつく。

「ぐわあああーーーー？」

「鋼牙さんーー！」

幸い、鎧を纏つてる為大怪我をする心配無いが、見た所シャルロッテの刃はソウルメタルにも耐えられるようである。

さらに鎧を纏つていられる時間は限られている。

99・9秒、それが鎧を纏つていられるまでの制限時間。

マミはシャルロッテに向かい走り出し、シャルロッテの足元を銃で撃ちまくる。

「鋼牙さんを離しなさい……」

足元のバランスが崩れ、シャルロッテは前方に倒れこんでマミは当たらぬように回避。

さらば！その衝撃で牙狼が解放される。

「礼を言ひ」

「いえ」

牙狼は立ち上がり、「轟天！…」と叫ぶと牙狼の背後に光が現れそこから金色の馬、ホラーを100体浄化した時に与えられる試練を乗り越えたことで得られる「魔導馬」と呼ばれる内の1体「轟天」を牙狼は召喚した。

「うわ、なんか金色の馬が出てきた！」
(か、可愛い……)

まどかはなにか轟天を見て可愛いと思っている様子。

牙狼は轟天に跨り、シャルロッテの方に向かつ。

『ブルルル……！』

シャルロッテは牙狼を睨みつけ、再び牙狼に噛みつこうとする。

『噛みつくしか脳のねえ奴だ』

しかし、シャルロッテはマミの放った銃弾で牙狼への攻撃を阻止され、轟天の体当たりで後方に倒れこむ。

【シャアアア！？】

「今です、鋼牙さん！」

「トドメだ！」

轟天が前足を掲げて大地を踏みつけると牙狼剣は巨大な大剣「牙狼斬馬剣」へと変化し、立ち上がろうとするシャルロッテに一直線に轟天は走る。

それに気付いたシャルロッテは脱皮しようとすると……。

「させないわ……」

マミが出したリボンによりシャルロッテの口が縛られる。

【フグウウ！？】

「ハアアアア！？」

それよりも早く牙狼が牙狼斬馬剣でシャルロッテを切裂き、上半身と下半身が真っ二つに割れるように切裂かれて爆発した。

【キシャアアアアア！？】

鎧を解除し、轟天も消えた後、結界が消滅。

尚、この時マミの魔法をどうにか切り抜けられたほむらはこの戦いの様子を陰から見ていた。

(冴島鋼牙……あいつは一体、何者なの？　巴マミを、救うなんて……！)

ほむらが初めて黄金騎士の存在を知った瞬間だった。

*

次回予告。

ザルバ

『よう、もしも自分の大切な人が傷付いてる所を見たらお前等はどうする？　自分の大切なにかを賭けてまでそいつを助けるか……次回『奇跡』。助ける代わりに自分が不幸になるかもな』

『覚悟』（後書き）

鋼牙のキャラが少し違つてしまつた気がしますが、いじしないと鋼牙の台詞が無くなるので……。

『奇跡』（前書き）

甘党くんの結婚場です。

『奇跡』

マリの脇でまだかねて壁のマリが壁にあつていた。

「あの、マリさん話して……？」

「あのね、鹿田さん、魔法少女になるの……もつじじじへつ考えて見なー?」

突然のマリの言葉にまだかね「え?」といつ表情をして固まつた。

「見たでしょ? 私、鋼牙さんに助けて貰わなければあそこで死んでたかもしねない」

思ひ出すとゾッとするのをマリは堪え、言葉を続ける。

「あれで鋼牙さんの言つたことも全部分かった気がするわ。だからこそ、幾ら願いが叶つかってあんな危険なことに飛び込むことは無いのよ?」

これも先輩としての言葉だつと捕えたまだかね「はー」と頷き、マリの部屋から出る。

翠原の学校では廊下でもまどかとセイカが話をしていた。

「ねえ、まどかさん、今でも魔法少女になりたかったって思つてない?」

セイカの問いかにまどかは黙つたまま。

「なんて、そんな訳ないかもね……。」ソラもひみちへ鋼牙先生の言つてる意味とが分かつた気がするよ

「マリも同じ」と言つていた

セイカは「うう」と呟く。

まどかはマリと魔法少女コンビを結成しようと一度は決意した、だがシャルロッテ戦にて「本当の戦い」ところのを大体理解した。

だからマリ、まどかは怖かつた。

それを聞いていたキュウベえは無理強には出来ないと階段に向かい歩き去る。

階段を降つる途中、鋼牙とばつたり会つた。

「やあ、冴島鋼牙。まさか魔戒騎士と呼ばれるものがあれほどとは思わなかつたよ

「俺の一人の力じゃ無い。マリもいたから勝てただけだ」

鋼牙「それよりも」と言つて、キュウベえにあることを尋ねた。

「まどかがお前と契約すると、どの位の力を持つ?」

キュウベえを睨みつけながら尋ねる鋼牙。

「やつだね、まさしく強力な魔法少女が誕生するだろ。 それも
『マリヨリモ強』……」

鋼牙は「やつか」とだけ言い残し、階段を降りる。

(まさか、彼は気付いた? いや、そんなこと有り得ない)

*

以前、さやかが恭介といつ少年が入院している病院。

さやかはそこに行き、恭介の病室に学校帰りに買ったCDを持ってくる。

しかし、恭介は……。

「さやかは僕を虜めてるのかい?」

「えつ?」

「なんで今でも音楽なんて聴かせるんだ? 嫌がらせのつもりなのか?」

さやかを睨みつける恭介。

「だつてそれは恭介が音楽好きだから！」

「ツ、もう聴きたく無いんだよ…！自分で弾けない音楽なんて！」

「！」

怪我をしている左手を思いつきり隣に置いてあつたじりに叩きつける。

それをさやかが必死で止めに入った。

「や、やめて…！大丈夫だよ、きっと治るよ…！諦めなければ

「諦めろって言われたのさ」えつ？」

今のは医学ではどうしようも無い、だからもうバイオリンは諦めると医者に言われたのだ。

「動かないんだ、もう。奇跡か魔法でも無い限り」

「……あるよ、奇跡も魔法も、あるんだよ」

*

夕方、ほむらは人気のない道を歩いていた。鋼牙の後をつけた。

だが突然鋼牙が走り出し、ほむらは電柱の柱に隠れており急いで鋼

牙を追いかけよつとするが……。

「なぜ俺をつける?」

何時の間にか背後に鋼牙がおり、咄嗟にほむらは鋼牙から離れる。

(「こつ、何時の間に……!）

「俺になにか用か?」

ほむらは焦っている表情から何時もの落ちついた雰囲気に戻り、單刀直入に鋼牙が何者かであることを尋ねた。

『おいおい、またその質問か』

「な、なに今の声!?」

ザルバが喋り、ほむらが辺りを見回す。

「取り合えず、お前のことから説明だな、ザルバ」

『ああ』

そして鋼牙が魔戒騎士や別世界のことをほむらに話して、今度は鋼牙がほむらに質問を。

「暁美ほむらだったな、俺もお前に質問がある。お前がキュウベえを狙つたりしたのは、本当に魔法少女の誕生を阻止しようとしたのか?」

鋼牙の質問の内容に驚いたのか、ほむらが目を見開いた。

しかし……。

「あなたはまだ信用できない、だからそこまでは教えられないわ」

*

その夜のことだ、まどかは帰りが遅くなり、既に外は暗い。

その時、クラスメイトで友人である少女「志筑仁美」^{しづきひじみ}が歩いているのが見えた。

だがおかしい、今日は稽古などが合つた筈なのに……。

まどかが仁美に話しかけると、仁美の首筋に魔女の口付けを見つけた。

「あら鹿田さん、御機嫌よ」

眼は光を失っている状態。

「仁美ちゃんどうしたのー? どこに行こうとしたのー?」「どこって此処よりもずっと良い場所ですよ、そうですわ、鹿田さんも一緒に」

周りを見ると仁美と同じく魔女の口付けが首にある者達が周りにいた。

(この人達もまさか！？)

マミかほむら、鋼牙に連絡しようとも電話番号も知らない上に鋼牙は携帯など持っていない。

まどかはこのまま流される様に仁美達について行く。

「……」

その様子を鋼牙に似た格好をしているがコートは黒いものを着こんだ男性が見ていた。

そして人気のないとある小さな工場まで辿り着き、中に入ると椅子に座つて頭を抱えている男性がいた。

「俺はダメなんだ、こんな小さな町工場一つ満足に切り盛りできなかつた」

今の時代に俺の生きる場所は無い、その言葉を合図にするかのように男性の足元にあるバケツの中の液体の中に一人の女性がなにか別の液体を入れようとしていた。

まどかはそれらを混ぜることで猛毒のガスを発生させるのを母から聞いている。

だから急いでまどかが止めに入るが。

「ダメ！！ それはダメ、みんな死んじゃう……」

「邪魔してはいけません！！」

しかし、仁美がまどかを抑える。

「あれは神聖な儀式なのですよ、私達はこれから素晴らしい世界に旅に出ますの、それがどんなに素敵なことか。あなたもすぐに解りますわ！」

仁美がそう言つた後、大勢の拍手が起こる。

「ツ！」

その時だ。

「素晴らしい世界？ 僕はそうは思わないけどなあ。 アンタ達は惑わされてるだけだ！」

突然、大勢の人達の後ろの方から誰かが高く飛びあがり、そのままバケツの元までやつてくる。

「よつ！ どうやら君は無事みたいだね」

「あ、あの……（一）の人の格好、なんだか鍋牙さんに似てる……？」

「

まどかの前に現れたのは先程の男性だった。

男性はバケツを掴みあげて窓に向かつて放り投げるとガラスを突き破つて外に放り出される。

「さて、次は逃げるよー。」

「えつー!？」

まどかの手を退いて男性は走り出し、魔女によつて操られた人々は2人を追いかける。

そしてある部屋に隠れて身を潜める。

「あ、あの、わつきは有難い『わざいました』

「んつ？ いじょいじょ別に」

まどかに笑顔を見せる男性、まどかが男性に名前を尋ねる。

「私、鹿田まどかって言います

「まどかちゃんね、俺は『涼邑零』^{すずむらわい}。君は俺が守るよ、どうせまだ

から魔女つてのも斬る」

「えつ？ ま、魔女を知ってるんですか！？」

零は「まあね」と答える。

だがその時だ、突然空間が歪み、背後に複数のテレビが現れる。

「くつー!？」

「……」

零はどこからか2本の剣、鋼牙とタイプは多少異なるが、「魔戒剣」を取りだし構える。

テレビの中の映像はまどかが魔法少女になると「記録などが映し出されており、零は……。

『ゼロ、惑わされないで』

零の左手につけている手袋の上にあるザルバに似たもの、「シルヴァ」が零に言つ。

「分かつてゐや、シルヴァ」

零はまだかとは違つものが見えていた、それはマントを身につけ、黒い生物的な鎧を纏つた「暗黒騎士・呀」あんこくきし キバが自身の恋人であつた人物を剣で突き刺す映像……。

「こんなのはザワザ見せなくとも、俺はこの日のことを見ればしない。だから……！」

零は片方の魔戒剣でテレビを突き刺し、テレビを破壊した。

「意味ないんだよ、こんなもん……！」

零はまだかを見ると恐らく自分と同じように過去の映像を見ているのだと思い、まだかに呼びかける。

「まぢかちゃん、テレビを見るなー！」

「へえつー？」

零の言う通りテレビを見ない様にするまぢかだが、次の瞬間また空間が変わり、まぢかと零は空中に浮かんでいた。

(今度はなんだ……んつ？)

下を見るとそこには2体の人形のよくな使い魔があり、その2体はハコを持っている。

それが魔女の本体、「ハコの魔女」だ。

（生身のままじゃこっちが不利か……）

生身のままでは魔女の力に影響される、零はそう考え、魔戒剣2本で円を描き、振り下ろすと牙狼とは違つ銀色の狼の鎧を零は見に纏う。

その名は……。

「銀色の魔戒……騎士？」

「銀牙騎士・絶狼」となつた零は魔戒剣が変化した「銀狼剣」を手に持つ。

鎧ならば魔女の力の影響はあまり受けない、その為自由に動くことが可能になつた絶狼は真下にいるハコの魔女に一直線に落下して向かつて行く。

だが、ハコの魔女の身体から先程の使い魔が複数現れて絶狼を迎討つ。

「邪魔だあああー！」

銀狼剣で自分を迎え撃つてきた使い魔達を絶狼は次々切裂き、遂にはハコの魔女の元まで辿りつく。

「さやあああ……？」

突然、上方から悲鳴が聞こえ、上を見上げるとそこには何時の間にか4体の使い魔がまどかの手足を引っ張りまどかを殺そうとしていた。

「しまつた！？」

しかし、青い閃光がまどかを引っ張っていた使い魔達を貫き、使い魔4体を倒した。

「えつ？ あれは……」

その青い閃光が絶狼の前に落下し、姿を現す。

それは青い騎士のような格好をしたさやかだった。

「んつ？ アンタもしかして魔戒騎士？ だつたらちょっと手伝つてよ、こいつ潰すの！」

「OK、いいよ」

銀狼剣を構える絶狼と剣を構えるさやか。

2人の周りに先程よりも多くの使い魔達が現れるが、絶狼とさやかは一瞬で使い魔達を倒してしまい、さやかが剣を振るつてハコの魔女を叩きつける。

【キアアアアアア！？】

ハコが潰れ、その中から本体と思われる魔女が出てくる。

「これで……トドメだつ！！」

さやかと絶狼が同時に魔女を切裂き、魔女は悲鳴のよくな声をあげながら血らしきものを吹きだしながら消滅した。

結界が崩れ、元の空間に戻る。

零は鎧を解除

「『めん』『めん、間一髪だつたね』」

「なぜか？」

でも二人かかじと言えと初めてにしかや上手くせうたでしょ

二

そこに丁度鋼牙とマミが入ってくる。

「あつ、マリちゃんと鋼牙さんおそーい」

「美樹さん……？」

マニは田を見開き、鋼牙は零がいることに気が付く。

「零！」

「よつ、
鋼牙、久しぶり」

「なぜお前がここにいる？」

— もあ。俺もよく分からんんだよな。

されどよく分からぬいんだけれど

零はそそくさとその場から立ち去っていく。

『まさかあいつまで来てるとはなあ』
「ああ」

*

次回予告

ザルバ

『まさかあいつ等まで来てるとは思わなかつたぜ、それにしても魔法少女つてのは何人いるんだろうな。多くいるなら偉く敵対することもあるだろう。次回『対立』、まさかまたあの2人が戦うなんてことないだろうな』

『奇跡』（後書き）

零のキャラがどうも難しいな……。

因みにこの世界きた影響で破滅の刻印も無くなっています、零も。もしかしたら翼も出るかもしれません、魔戒戦記に出るみたいです。

『対立』（前書き）

落書きの魔女って未登場ですからその魔女が登場します。ただ、見た目はホラー型の魔女ですが……『見た目』は。

『対立』

あれから翌日、ややかとまじかは学校に出席しておつ、仁美もまた無事に出席していた。

「クカ～」

昨日の疲れか授業中に眠りをしてこらやか。

因みに今は鋼牙の授業で数学である。

「……」

鋼牙はチョークをさやかに投げつけたやかの額にチョークが直撃。

「あたあ！？」

額を抑え込むさやか。

「寝不足なのは分かるが授業中に寝ていい理由にはならないぞ？」

「あつ、はーい鋼牙先生」

ザルバはこんな鋼牙を見て「以外に教師でもやつていけるんじゃないか」などと思っていたりした。

授業が終わると「美がやつてきたりやかに」対して微笑む。

「まあ、もしかして美樹さんも寝不足ですか？」

「あれー？ 仁美どうしたの？」

さやかもまどかも昨日あったことは知らないフリをしている為、仁美になにがあったのかを聞いていた。

「なんだか私、夢遊病というか昨日気付いたら大勢の人と一緒に倒れて……」

昨夜は病院やら警察やらと色々忙しかったらしい。

「えー、なにそれ？」

*

その後、まどかとさやかはある草むらの坂にまどかは座り、さやかは寝ころんで空を見上げる。

「やー、久々に気分はいいわー」

まどかはさやかに魔法少女になつて怖くなかったのかと聞いかける。

「マリさんも言つてたけど、あんな思いをさやかちゃんがするかもしないんだよ？」

不安な顔でさやかの顔を覗き込むまどか。

「そりやちょっとは怖いけど、まだかや仁美一人ともくしてた方がよっぽど怖かつたかもしれないし」

だから自分は公開して無いとさやかは立ち上がる。

「これからはこの街の平和はマリさんや鋼牙さん達と一緒に魔法少女さやかちゃんが守つて行つちやつよー！」

と張り切つた所で後ろから声が聞こえた。

「残念だけど、多分それは長くは続かないよ」

振り返ればそこにはケーキの入つた箱を持つた零が立つていた。

「あなたは……」「やつ言えば名乗つて無かつたつけ？　俺は涼邑零。　氣をつけ礼……の零ね！」「

と零はここやかな顔で頭を下げて礼をする。

さやかとまどかも自己紹介した後、零になぜ長くは続かないのか聞いてみると……。

「俺も鋼牙も元の世界にどうしても帰らなくちゃならない。　君等魔法少女に使命があるように俺達魔戒騎士にも使命があるんだ。それに鋼牙にも待つてる人がいるし……」

「じゃー」とだけ言い残してその場から去つて行く零。

「あの人も、鋼牙さんと同じ魔戒騎士なんだよね？」

「う、うん。なんか鋼牙さんとは正反対つていうか……」

その後、さやかは恭介の病院に行きお見舞いに来た時には恭介は腕が治つておりさやかとの仲は何時も通りのものとなつていた。

そしてこの前に言つた言葉にさやかに謝罪し、さやかはそれは「気にしなくていいの！」と許して恭介を車椅子に乗せて屋上に行くと病院の先生や看護婦、恭介の両親があり、父親がバイオリンを渡すとみんなから「引いてくれ」と頼まれた。

恭介は頷いてバイオリンを引き、さやかは空を見上げる。

(後悔なんて……ある訳無い)

その様子を別の建物の屋上から見る赤い髪の毛の少女が魔法で作った双眼鏡に目を当てて様子を伺つていた。

「ふーん、あのが新しい魔法少女ね。 チョロソウジヤン。 マニはなんか戦意喪失つて感じだし」

だが隣にいたキュウベえに、「イレギュラーがいる」と言われて驚きの声を出す赤髪の少女、「佐倉杏子」

イレギュラーところの「暁美ほむり」「冴島鋼牙」のことだらう。

零はキュウベえと出会ひていないので除外。

「そいつ等何者だよ？」

「さあ、僕にも分からない」

「はあー？」

キュウベえ曰くほむらと契約した覚えはキュウベえには無いし、鋼牙は元から何者なのかサッパリ分からぬ、異世界の人間といふことだけだ。

「だから僕にもどういう行動に出るか分からないんだ」

しかし、杏子は余裕の笑みを浮かべる。

「フン、上等じゃん」

その時、杏子が新しく食べようとしていたたい焼きをヒョイッと取り上げて口に入れる者がいた。

杏子は振り返り、その者、零を睨みつける。

「零ー！ テメーあたしのたい焼き勝手に食つんじゃねえー！」
「悪い悪い、でもほり、お土産にケーキ買ってきたんだ、この街で
美味しいって評判の」

「ホントかー？」

と期待を膨らます杏子だが……。

「美味しかったな」

零は持っていたケーキの箱を折り畳んだ。

「もう食つてんじゃねえかー！」

「そう怒るなつて、短気は損氣つて言ひせ?」

「杏子、その人は誰だい？」

キコウベの問いかけに杏子は答える。

「あ、ちよっと色々事情があつて魔女狩りに行き合ひて貰つてん
だ」

「ふーん」

*

ある喫茶店でまどかは話があるとほむらと鋼牙を呼びだしていた。

「話つてなに?」

「え、えっと……」

ほむらと鋼牙の間に挟まれているまどかはめいと辛こな空氣を味わつた
だらう。

そしてまどかの話とは極端なものだった、やせかと伸びていてま
じひとつ……。

「美樹ちゃんのが心配なのね

「つさ。やせかちゃん、自分は平気だつて言つてゐるナビマア//そ
の時みたいになつたらつて思つて帰へて……私じや力になつてあげ
られない」

まどかはだから鋼牙とほむらに願いがしたいと言いく出す。

「あの子はね、すぐ誰かと喧嘩しあやつたりするけど本当は凄く良い子なんだよ？ 優しくて勇氣があって誰かの為と思えば必死で…」

…

「戦う者としては致命的かもな」

鋼牙から返つてくる冷たい反応。

「度を越した優しさなら甘さに繋がるし、蛮男は油断になる、そしてどんな貢献にも見返りはない」

ほむらもわかつ返し、鋼牙もそれに同意した。

「度を越した優しさは確かに甘さに繋がる……（昔の俺の様にな…）」

鋼牙は少年時代、父「さえじまたいが冴島大河」と共にホラー狩りの旅に出でいた時、自分に玩具をくれた男性がいた。

しかし、その男性は実は「ホラー」であり、鋼牙はその男性を庇いホラーに人質にされたが大河が纏つた牙狼に救出されたことがある。

「美樹さやは契約なんとするべきじゃなかつた、彼女を監視しておかなかつたのは私のミスだわ。悪いけど彼女のことは諦めて」

ほむらはその場から去り、鋼牙も立ち上がって去つて行つた。

まどかは涙目で「どうしてなの？」と呟く。

*

夕方、さやかが魔女退治に出かけようとする所にはまどかがあり、さやかはまどかに駆け寄る。

さやかがまどかにどうしたのか尋ねてみた所、一緒に魔女退治を付
き合おうといらしく。

さやかはまどかが一緒に心強いといつゝことで一緒に魔女を探しに
キュウべえと共に向かった。

ある路地裏に使い魔の結界が張つてあり、さやかとまどか、キュウ
べえは使い魔を探す。

すると……。

『ぶう～ん！』

女の子が飛行機に乗つた落書きのような使い魔が現れ、魔法少女になつたさやかは斬撃を放つが突然なにかが伸びてきて斬撃を弾いた。

「弾かれた！？」

「やっぱり来たね、杏子」

奥の方から赤い服を着た……魔法少女姿の杏子が槍を持って奥から出てきた。

「あんた何やつてんのさ？ アレ使い魔だよ？ グリーフシード持つてる訳無いじゃん」

「魔法少女？ あつ、逃げちゃう……！」

さやかが逃げようとする使い魔を追いかけようとするも杏子が阻む。

「だからやめのうつーの」

「なにすんの！？ あれ放つておいたら何人の人が殺され……」

杏子は「当たり前だろ？」の一言で切り捨てる。

「四、五人食わせりや魔女に成長してグリークシード孕むのにさあ、卵産む前の鶏絞めてビーすんの？」

「あんた魔女に襲われる人を見殺しにする気……？」

杏子を睨みつけるさやか。

「なんかさあ、大元から勘違いしてるよねえ。 アンタ？」

弱い人間を魔女が喰う、その魔女を自分達魔法少女が喰うと言い出す杏子。

「それが当たり前のルールでしょ？ ガツコ一で習ったよねえ？ 食物連鎖つてやつ」

「残念だけどさ、説得力無いよ杏子ちゃん？」

杏子の後ろから零が現れる。

「零……」

「零さん……」

「杏子ちゃんさ、学校行つて無い子がそんなこと言つてもまーつたく説得力無いんだよね?」

杏子は零に「う、うるせえ!…」と怒鳴る。

「まあ俺も使い魔放つておけないっていうのはそこと同意見だから俺が狩つといてあげる。そつちはそつちで話しあつてくれよ?」

それだけ言つと零はいそいそと使い魔を追いかけた。

「あの野郎……」

*

その頃、鋼牙は魔女の気配がするからと言つてマリと共に行動しており、何時の間にか魔女の結界の中に入つていた。

『所でマリ、お前もう大丈夫なのか?』

「ええ、もつ平氣です」

ザルバニアが微笑み、魔法少女の姿で銃を構える。

「それにして、使い魔が見当たらぬな……」

確かに魔女を守る筈の魔女がいないことに疑問を感じたが、使い魔から「忘れられてる」か「放っておかれてる」のがこの結界を発動している魔女「落書きの魔女」だ。

結界の風景はまさしく落書きである。

その時、あの落書きの使い魔が偶然にも魔女の元に戻ってきたのだ。

『ぶう～ん！…』
「使い魔！」

鋼牙は魔戒剣を抜き、マリは銃を向けたがその直後に零が現れて空中にいる使い魔に魔戒剣の一本を投げつけて使い魔を貫いた。

落ちる魔戒剣を受け止める鋼牙とマリの前に零が現れる。

「零……！」
「やあ鋼牙」

その後、マリに零のこと話をした後3人は魔女を探す事に。

「急ぎまじょ、零さんの話だったら佐倉さん美樹さんを……」

マリは杏子と面積があるついで結界からはそう簡単には逃げられな

いし魔女を放つておく訳にもいかない為魔女を倒すことを優先にしなければならない。

そして彼等の前に、今までの魔女とは違い、珍しく等身大の黒い身体を持つ魔女が現れた。

だがその魔女は鋼牙とザルバが見た事のある姿をしていた。

『おいおい、ありや魔女つていうより……』

「俺が戦つたことがあるホラーに似ているな」

魔女の姿はトランプのジョーカーの道化師のような姿をしており、鋼牙が戦つたことがあるホラー「ゲノジカ」にそっくりだった。

『ウウウウウウウ』

『なんていうか、見た目は落書き全く関係ないわね』

ボソッと正論を言つシルヴァ。

「なんであれ放つておく訳にはいかない」

それぞれの武器を構え、3人はゲノジカモドキの魔女に戦いを挑んだ。

ゲノジカの周りにクレヨンが浮かび、数秒で銃のよつた武器を書き上げそれを右手で取つて鋼牙、零、マミに撃ちまくる。

「くつ」

銃の腕ならばマミの方が上であり、ゲノジカの放つ銃弾を全て避け

ながらゲノジカに自分の魔力弾を撃つがゲノジカの持っている銃は剣となつてマミの放つ魔力弾を全て弾いた。

「そんな！？」

「ハアアアー！！！」

右横から魔戒剣を振り下ろす鋼牙だがゲノジカは受け止めて鋼牙の腹部を殴りつける。

「ぐう！？」

『おいおい、こいつホラーのゲノジカより強いんじゃねえか？』

『オレノ事ヲ好キニナラナイ奴ハ邪魔 NANDA YO』

そう言いながらゲノジカは零に向かつて走り、何度も何度も斬りかかるが零は魔戒剣2本を使いゲノジカの攻撃を受け流している。

「なんか俺のだけヤケに殺意むき出して無い？」

『それになんだか訳の分からないこと言つてるわよ？』

『仇ヲ討タセテ貰ウ、俺自身ノ仇ヲナ！』

零はゲノジカから一旦離れ、マミが急接近しながら銃でゲノジカを撃ちまくつてダメージを与えていた。

『グウウウー！？ 邪魔ナシダヨ！ 倭ノ思イ通リニナラナイモノハ全テ！』

飛びあがり、再び剣を銃に変えて銃でマミを撃ちまくるがマミの前に立つた鋼牙が魔戒剣で全て弾いた。

その時だ、ゲノジカの身体からリボンが現れてゲノジカを拘束した。

「ただ銃を撃ちまくつてゐるだけだと思った？」

拘束されたゲノジカは地面へと落ち、身動きが取れないでいた。

「零！ 今だ！！」

「ああ！！」

鋼牙と零は同時にゲノジカに向かつて行くが……。

『又オオオオ！！！ コレモ全テ乾巧ツテ奴ノ仕業ナシダ！！』

ゲノジカは無理やりマニの拘束を力づくで破り、鋼牙と零を迎撃つ体制に入る。

零と鋼牙の2人はそれぞれの魔戒剣で円を描き、零は「銀牙騎士・絶狼」、鋼牙は「黄金騎士・牙狼」となつて絶狼の魔戒剣は「銀狼剣」という2本の双剣、牙狼の魔戒剣は黄金の剣「牙狼剣」に変化。

『グガアアアアア！！！！』

クレヨンがゲノジカの元に浮かびあがり黄色い三角状の物体が浮かびあがつた。

その際『エクシードチャージ』という音声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

ゲノジカは跳びあがつて両足を前に突き出して三角状の物体と両足が合わさつたキックを絶狼と牙狼に放つが、ゲノジカのキックは絶狼の銀狼剣、牙狼の牙狼剣とぶつかり合つ。

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ଏବଂ ମହିନେର ପରିଚୟ

牙狼と絶狼は力を込めて牙狼剣と銀狼剣を振り下ろし、ゲノジ力を
破裂いた。

身体をX字に切裂かれたゲノジカは血らしきものを吹きだしながら結界共々消滅した。

「アーティストの世界」

「杏子ちゃんそんなにヤバい」とするのかなあ?」

一
鬼に角行くぞ」

マリ、零、鋼牙は急いでさやか達のいる場所に向かった。

*

ザルバ

『ぶつかり合う魔法少女達、おいおい、鋼牙達早くしねえと大変なことになるぜ？ 次回『真実』お前は自分が正しいとやつてることを凄く否定された時、どうする？』

『対立』（後書き）

はい、完全にネタに走っていますwww
零に殺意むき出しなのはあの灰色の龍怪人と顔が一緒なので……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4896z/>

牙狼<GARO>～MAGICA SENKI～

2012年1月13日15時52分発行